

的記憶に該当する。技術ならびに物質は記憶の媒体であるにもかかわらず、それが各個人において動作として継承されると、その記憶の起源は忘却され、生得的に可能であったかのようにみなされるという差延的構造に置かれている。

ルロワ・グーランの議論は、物質世界を生きる私たちが、その身ぶりの一つ一つに、物質的技術という外部記憶を通して、過去の人間からの記憶、すなわち動作連鎖を継承していることを教える。その意味において、倫理的ではない仕方において、私たちは死者たちの記憶と交流している、あるいは、死者たちの記憶を生きていると言える。そうした考察は、自己が自己以外のものによって構成されている可能性を問う試みでもあり、その意味において、宗教哲学の課題たりうるのである。

ゲオルグ・カントルの神学

落合 仁 司

ルネ・デカルトに端を発する近代幾何学はユークリッド空間 R^n に代表される無限の空間を対象として来た。さらに近代幾何学は無限の空間の大域的な性質を対象とするに及んで、ユークリッド空間 R^n と無限空間であることにおいて同一であるにもかかわらず、自らの限界を有することにおいて差異化される球面 S^n や射影空間 P^n を発見して来た。この限界を有する無限空間という日常言語から見れば端的な論理矛盾と言う他はない空間の存在を始めて証明したのが他ならぬゲオルグ・カントルである。

る。

デカルトは完全な無限、カントルは現実的無限、アリストテレス・トマス流に言えば完結した無限を、神の述語と考えていた。完結した無限、それこそ限界を有する無限の他ではない。すなわち近代幾何学の対象である限界を有する無限は神の述語なのである。ここに神の述語として近代幾何学の観念あるいは理念を援用する数理神学、幾何神学、位相幾何神学が成立する。

そもそもデカルトが自らの思考、見ることに「自らが思考している」とこと同等あるいはそれ以上に明証的すなわち見えるとしたのは完全な無限したがって限界を有する無限を述語とする神であった。デカルトにとってコギト以上に明証的であるのは幾何学の理念を述語とする神の他には考えられなかったのである。さらにカントルと同門のエドムント・フッサールが現象学的還元の結果に明証的であると直観した志向の対象は限界を有する無限という幾何学の理念の他ではありえなかった。デカルトのコギトもフッサールの志向もまず何よりも限界を有する無限という幾何学の理念、神の述語をその対象としているのである。

限界を有する無限とは、現代幾何学の中心に位置する位相幾何学の言葉に言い換えれば、位相空間分けでもコンパクト位相空間である。位相空間は自らの部分集合の無限和が存在するという意味において無限であり、その無限和（限界であることが証明される）それ自体もまた自らの部分集合であるという意味において可能的・潜在的に限界を有する。この可能的・潜在的な限界が自らの（外部ではなく）内部あるいは境界に存在する

という意味において現実的・顕在的になった位相空間がコンパクト位相空間に他ならない。

したがって有限な私たちの他者として私たちを無限に超越しつつあたかも有限な私たちと同じように限界を有し私たちに内在する可能性を持つ神ご自身の述語として位相空間が、有限な私たちの他者として私たちを無限に超越しつつ同時にあたかも有限な私たちと同じように限界を有し現実私たちに内在し、私たちと同じ苦しみを苦しみ、十字架に付けられ、私たちと同じ死を死んだ主イエス・キリストの述語としてコンパクト位相空間が相応しい。位相幾何神学は、神を位相空間たとえばユークリッド空間 R^n 、キリストをコンパクト位相空間たとえば球面 S^n と述語付けるのである。

神を位相空間、キリストをコンパクト位相空間と述語付けることは、神あるいはキリストを位相空間あるいはコンパクト位相空間という位相幾何学の理念によって定義することでは全くない。ある哲学的な理念したがって数学的な理念によって神を定義することは、その理念を神の偶像とすることに他ならない。位相幾何神学は偶像崇拜では全くない。位相空間やコンパクト位相空間は、神の本質を定義する偶像ではなく、私たちに人間に見える限りにおける神の像すなわち神のアイコンに他ならない。言い換えればユークリッド空間 R^n や球面 S^n といった位相幾何学の図形は、イエス・キリストの板に絵具で描かれた図像と同じように、神が自らを啓示するアイコンなのである。

初期R・ロランにおける芸術と宗教

掛川 富康

ニヴェルネーの一小邑クラムシーから、パリのリセ・ルイ・ル・グランへ、さらに高等師範へと進んだR・ロランは、母親の教育熱に助けられながら、芸術面、とくに音楽においてはすでに卓越した感受性と技巧を備えていた。しかし、音楽家への道は早くも自覚的に断念し、高等師範では、ドイツの文献学に習ってフランス歴史学に革新をもたらそうとしたG・モノーに学び、この師の推薦によって、フランスの俊英の集まるローマのファルネーゼ宮、フランス考古学院に学んだ。ローマ時代、自身は古文書への沈潜と歴史遺跡に足をはこぶ毎日であったが、このロランを社交界に導き、人間的にも著しく成長させたのは、すでにパリで、モノーに紹介された年長のドイツ人女性の「理想主義者」M・V・マイゼンブークである。

ロランの内面性の理解のためには、一九世紀後半のフランスとドイツをおそい、マイゼンブークの中で拮抗していた、レアリスムとイデアリスムとの相克を理解する必要がある。かつてスタール夫人の発見した、ゲーテ時代のイデアリスムのドイツではなく、ビスマルクの体現するレアリスム(F・ベルトー)が、ロランの時代のドイツであり、そこにロランはドイツ精神の退廃を見ている。他方、同時代のフランスも、世紀の初頭のロマン主義以来、積極的な価値に領導されることなく、懐疑・唯物主義・厭世主義・デカダンの享楽主義に支配さ